

未分化多形肉腫（みぶんかたけいにくしゅ）

未分化多形肉腫について

未分化多形肉腫（undifferentiated pleomorphic sarcoma：UPS）は、軟部組織に生じる悪性腫瘍の一つです。かつては悪性線維性組織球腫（Malignant Fibrous Histiocytoma：MFH）と呼ばれていましたが、特定の遺伝学的特性や分化傾向を示さない分類不能な悪性軟部腫瘍として再分類されました。高齢者に多く、周囲組織への浸潤性が強く、遠隔転移も生じやすい悪性腫瘍です。

疫学

軟部肉腫の中では比較的頻度が高いとされ、中高年の方に多く発症する傾向があります。一方で、若年者に発生することも否定できず、幅広い年齢層で見られます。男女差は大きくありませんが、男性の方がやや多いとする報告もあります。軟部悪性腫瘍の20%を占めると報告されています。また、過去に放射線を受けた部位に生じる放射線誘発肉腫の多くは未分化多形肉腫にあたります。

発生部位

体のさまざまな軟部組織に発生しますが、特に下肢（大腿や下腿）や上肢の深部、あるいは体幹部に多く見られます。また、まれに皮膚直下や浅い軟部組織に発生することもあります

症状について

初期には痛みを伴わないしこりや腫れとして気づかれることが多いです。腫瘍が大きくなると、周囲の筋肉や神経を圧迫して痛みやしびれ、運動障害などが生じることがあります。進行すると表面の皮膚が変色したり、腫瘍が潰瘍を形成したりする場合があります。

診断について

診断の際は、まず身体所見に加えてMRIやCTなどの画像検査を行い、腫瘍の大きさや広がりを把握します。確定診断には生検による病理組織検査が必要となります。特定の分化傾向を持たず、病理学的に他の肉腫の診断基準を満たさない腫瘍が未分化多形肉腫に該当します。

治療について

治療の基本は外科的切除であり、他の悪性軟部腫瘍と同様に広範切除（腫瘍の取り残しがないように、周囲の健常な組織と一塊にして腫瘍を摘出すること）が推奨されます。高悪性度の腫瘍であり、発生部位や腫瘍の大きさ、患者さんの年齢や全身状態を考慮して化学療法を行うことがあります。

執筆者

- 氏名： 酒井 智久（さかい ともひさ）
 - 所属医療機関： 名古屋大学附属病院
 - 診療科： 整形外科
-
- 氏名： 西田 佳弘（にしだ よしひろ）
 - 所属医療機関： 名古屋大学附属病院
 - 診療科： リハビリテーション科